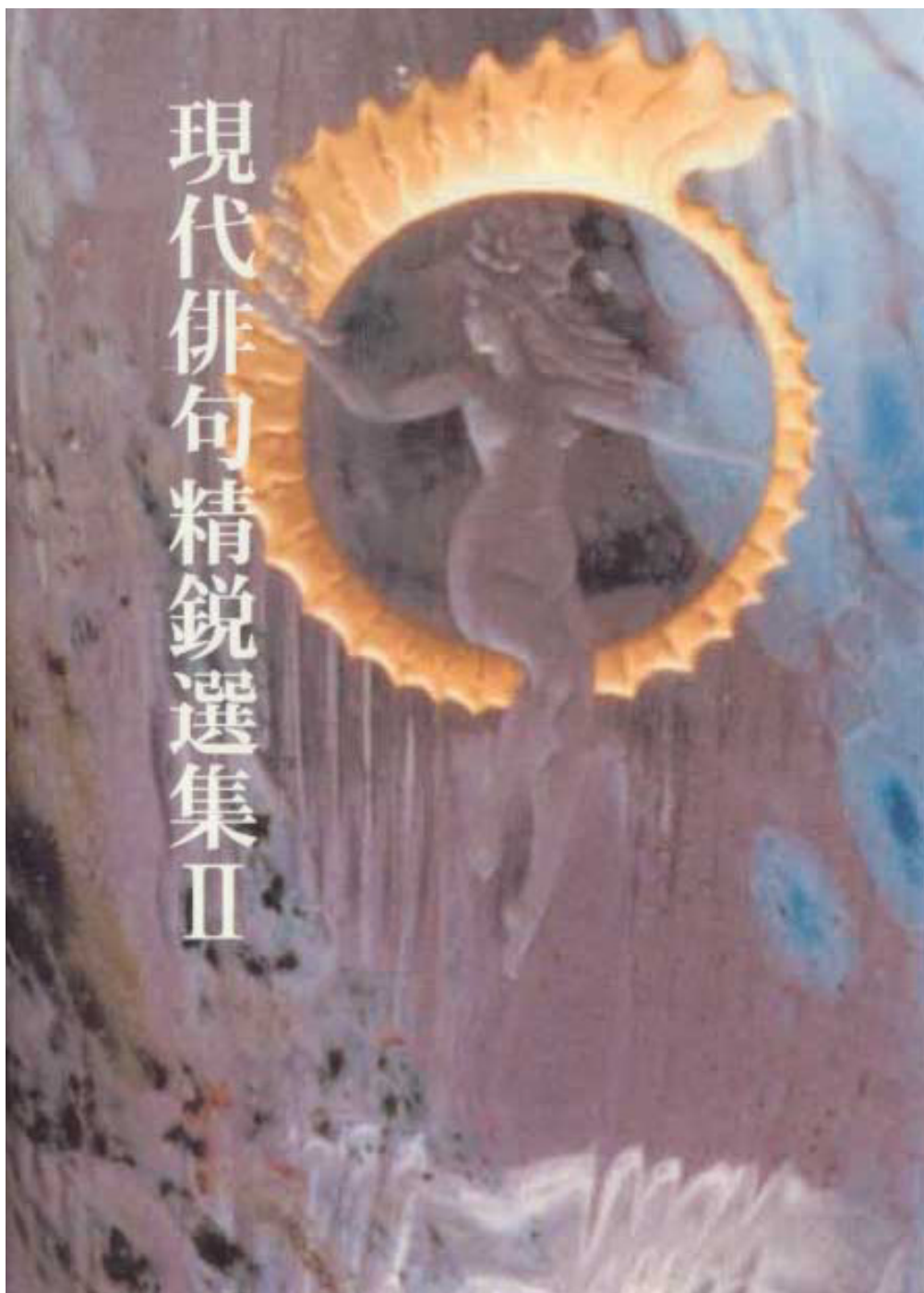


現代俳句精銳選集Ⅱ



塩
路
隆
子



万幹の竹ある淑気茶筌邑

少年に自立のきざし独楽まはる

初湯より嬰をまるまる包み出す

献体に未だある迷ひごまめ炒る

定期船島へ初荷の灯油着く

通販で選ぶファッション春隣

種を蒔く男ミレ一の絵のやうに

啓蟄をうながしてゐるホッピング

人の世の死別生別鳥帰る

文京区なるを恋猫はばかり

トランペット吹けばいよいよ黄沙降る

夕刊に春一番と脳死論

忠義てふはるかなる死語紀元節

いま口を開けば愚痴よ栄螺焼く

男雛より女雛たくまし園児劇

売れ残る坪百万の犬ふぐり

骨となるまでは女よ梅ひらく

全山の白梅とゐて孤独感

生涯に転居いくたび鳥帰る

手づかみにサラミ類ばる三鬼の忌

死の美学思ひめぐらせ春炬燵

恋の傷なしとは言へず白椿

桃咲いてをとこ優しくなりにけり

枕木に合はぬ歩幅や土筆摘

海荒れの大間垣うち猫の恋

久女ともなれず紐解く花衣

モナリザが髭蓄へて四月馬鹿

山頭火心地に寝ねてげんげ畑

菜の花の郷愁昭和初期生れ

一腑なき人とつつける桜鯛

感嘆の口せし埴輪揚雲雀

懐かしのシネマに泣きし朧かな

瞑想のカントデカルト座禅草

メーデー歌謠じてをり風呂洗ふ

妻の座に収まらぬ性燕来る

畝ごとにシュプレヒコール葱坊主

指ほどの胎児のビデオ風薫る

終章になほ一波乱明易し

ほどほどに棲みたる魔性シャワー浴ぶ

雲中にリフトの孤独岩ひばり

橋越えて鱧食べに行く法善寺

散水の弧を高々と電波の日

乙女らの五感くすぐる茅花風

過労死が頭を占めてをり蟻の列

麦茶炊き朝のはじまる大家族

薰風に出揃ふ四座や能篝

自分史の草案浮かぶ心太

佛みな美男に見えて堂涼し

イヤリング外す夜涼の摩天楼

鬼蜘蛛の一糸をたよる宇宙旅

薰風や児は一匹の蟻を拉致

麦秋や身によみがへる野性の血

大南風に男シャツ干す鮭番屋

一村は光秀鼻肩幟立つ

山藤のここにさびれし塩の道

まむし草自負の健脚笑ひをり

蚊帳たたむ術を話題に寝落ちけり

余生いま甚平似合ふ自由人

一次元失せたる心地昼寢覚

老いてなほ男に大志雲の峰

五欲みな衰へたるよ暑氣中り

漱石を読みゐて頑固白皚

青簾めぐらせ綺の世に棲まふ

流人井の暗きにこぼす赤のまま

殉教の墓は野の石真葛咲く

かまつかやすたれ港の廓路地

雁渡し奈良七口の常夜灯

風化てふ責め冷まじき白杵仏

燐寸いま擦らば芒の山は火に

冷まじやぬた場にのこるけもの臭

同型のベランダ二百天高し

不倫とは人盗むこと巴草

本物のあめんばうゐてセット池

くのーが霧らひて走るワンカット

紅葉湯に浸れば炎身に移る

繭神が留守を預かる田刈どき

一輛にこれ程の人紅葉駅

シヤネル着て学園都市の山案子かな

狐火に怯えしままの陸奥泊

乳房より重き梨剥きメロドラマ

色鳥に見とれて鍋を焦がしけり

女性史に娼の文字あり近松忌

小春日や戯画の兎の負け相撲

寺田屋に灯らぬ間あり北風荒ぶ

寒雁の棹立てなほす荒岬

大桶に宇陀の水鳴る寒晒

あすなるの雪払ひけり七尾線

行商の角巻深し無人駅

北斎の濤をうつつに風邪の熱

A型の血は母ゆづり雪を搔く

木枯を聞きつつ測る骨密度

児にまたも海鼠の生死問はれけり

押入れの闇の記憶や干蒲団

寒月が煌々僅かなる負ひ目

医者嫌ひ薬嫌ひのもらひ風邪

隣席はエイリアンかも海鼠食ふ

谷地果に鶴眠るべし冬月夜

煤逃げの男がふたり観覧車

それなりの暖衣飽食炬燵談

戸籍また元の二人や石路の花

したたかに転びて雪へ八つ当り

海^{ネフチ}神^{ユン}の乱心冬の怒濤生む

現代俳句精銳選集 II

発行 平成十三年八月二十五日

発行人 松尾正光

発行所 株式会社東京四季出版

〒160-0001 東京都新宿区片町一―一―四〇二

電話 〇三(三三五八)五八六〇

振替 〇〇一九〇―三―九三八二五

印刷 西武印刷株式会社

定価 二七〇〇円(本体二五七二円)

ISBN4―8129―0169―3

©2001 Printed in Japan